

日刊 動労千葉

79.6.2
No. 136

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二五八・九・(公衆電話)22七二〇七

「動力車新聞」のデマを糾弾する!

号外(その19)

実体のない「本部」小屋原交渉団の 反労働者的本質を自己暴露!

動労千葉一四〇〇組合員のみなさん! 全国の心ある動労組合員のみなさん! 動労千葉は、一昨日(五月三十一日)第二回臨時大会を開催し、30結成大会以降二ヶ月間の激闘の勝利を全体で確認し、さらに団結をうちかため動労大改革一八〇年代労働運動の戦闘的再生に向け力強く前進する方針を満場一致で決定した。とりわけ大会は、動労「本部」暴力集団による動労千葉破壊策動は権力・国鉄当局、国労、鉄労と一体となったまさに労働組合の仮面をかながらすたたりふりかまわぬ、労働運動史上類例のない悪質きわまるものであることをはっきりと認識したこと。かかる密集せる反動に、動労千葉一四〇〇組合員は労働者としての全存在をかけて勝利しつつあることを確認し、完全勝利まで闘い抜く決意を全体のものとして確認した。

着実に前進する動労千葉と崩壊の 危機に焦る「本部」暴力集団!

「動労千葉勝利の二ヶ月間」に比して、最近の動労「本部」暴力集団の状況はどうであろうか。暴力とデマをもってする「破壊オルグ」は次々と破産し、「総括」すらできない現状である。「一億数千万」という貴重な組合費をつぎ込み、「三万人」の組合員を投入しても「千葉再建」という願望が現実化しないことに焦り、そればかりかこのままでは動労「本部」暴力集団の「執行責任」が問われると危機意識にかられているのだ。こうした危機的現状にかられて現在行われているのが、「連日にわたるいやがらせ動員」と「ウソとデマの一大宣伝戦」を両軸にした陰湿な組織破壊攻撃であるのだ。

まさに反労働者的「本部」交渉団 の実態!

動力車新聞号外(その19)は真赤なウソでありデマ情報である。その理由の第一は、号外(その19)によると「みなさんの労働条件や待遇は今日まで中野一味の手によって放置されて来ましたが」と書かれている。動労千葉以外の組合員ならばこのデマにごまかされるかもしれないが、動労千葉組合員であれば一笑にふす代物である。千葉における労働条件や待遇改善の闘いは、船橋闘争以降の反合運転保安闘争の展開をもって着々と積み上げられ、印・三ダイ改をもって飛躍的に前進させている。乗務作業の緩和、ダブル泊の全廃、高齢者対策、定員増、定数の管内一括運用等々数限りなく前進させているのだ。この事実こそ動労千葉一四〇〇組合員は自信と確信をもって動労千葉に結集し闘っ

ているのだ。そればかりか「今後は本部が千葉局と直接交渉する事で守って行く事を明らかにします」等というが、事実はどうだ。

昇給交渉では、「三項八号の適用が少ない」と当局に要求し、あげくのはてに千葉市内某料亭で当局と「親睦」をはかるといふ醜態ぶりなのである。

「二線高架切替交渉」には姿を見せず放置しておいて、動労千葉一千葉当局の交渉が妥結するや千葉の運転職場に足をもたず千葉を代表する権限もないくせに、「三六協定は俺(小屋原)と結んで二線高架切替を行え」「業務命令を発し従わぬ者は処分せよ」等と「要求」している。これが「本部」と千葉局の「交渉」の実態である。まさに動労千葉破壊を当局の手を借りて行おうとするこれほどの反労働者的行為があるか。

「すぐにわかるウソ」でのデマ宣伝!

第二の理由は、五月一八日、「本部」一千葉局の昇給「交渉」なるものには「小屋原交渉部長以下交渉部全員出席 千葉局側藤田総務部長・・・」と抑々しく書かれているが、これまたウソである。事実は「本部」側は交渉委員九名中四名しか出席せず、藤田総務部長に至っては出席していなかったのである。

第三の理由は、

「『中野一味は抜てきは職場に混乱が起るから運転関係はいらぬ』としてこれまで営業にすべてまわしていた」従って「年間二〇〇号近い賃金の損をしている」昇給交渉は「当局一発回答で了解」等とウソとデマを書きつらねている。

しかし事実は逆である。五月一八日「小屋原交渉団」なるものこそ僅か一

裏へつづく